持田恵三『農業の近代化と日本資本主義の成立』

御茶の水書房　一九七六年一一月　三五二頁

大鎌邦雄

本書については、すでに星埜惇氏[1]や常盤政治氏[2]によって適切な書評がなされ、私も内容紹介を兼ねて、本書の主要部分の若干の論点について、批評を試みた[3]。

ここでは、それらとの重複を避ける意味もあり、さらには本書の基本的な問題視角を検討するためにも、補章Ⅰ「生産力としての近代」を批評の中心に据えようと思う。なぜなら、本書を貫いている問題意識の主要なものの一つが、近代・近代化とは何であるのか、ということであり、補章Ⅰにおいては、まさしくそれを正面から取り扱っているからである。

注(1)　農林省図書館編『農林図書資料月報』一九七七年五月号。

(2)　毎日新聞社『エコノミスト』一九七七年四月一二日号、読書欄。

(3)　農業経済学会編『農業経済研究』第四九巻第一号（岩波書店）。

一

近代・近代化という言葉の多義性については、今更改めて指摘する必要も無いであろう。それは、使用する人によってその意味内容が全く異なる事すらあるように思われる。こうした近代・近代化という言葉のあいまいさを、あらかじめ避けるために、本書では特に資本主義との相違について、次のように定義している。すなわち「やや抽象的にいうならば、資本主義に適合的なもの、適合的なものにすること、という意味である、経済面についていうならば、近代は資本主義と共に小商品生産をも含んでいる」（はしがき四頁）。これから明らかなように、本書でいう近代化とは、直接的には資本に包摂されていない小経営を、小商品生産経営として資本主義に適合していく過程のようである。だがこうしたものであるならば、従来資本主義の確立過程を指して使用されていた近代化という言葉の概念と何ら異なる所はない。

しかし、補章Ⅰにおいては、そういう程度にとどまらず、やや視野を広げ資本主義という体制を超えた工業化社会を形成す

るものとして、いわば人類史というべき次元の問題として次のように言っている。「工業化は資本主義とか社会主義という差をこえた共通の何ものかを生み出すことになる。そして近代化という概念は、このような変化の全体を漠然とさすものとなった」（二七七頁）。こうした工業化社会の形成ということを、近代化という概念の内容として設定することの必要性は、戦後の後進諸国における経済建設の設題が工業化であり、社会主義諸国においてもその経済的目標が工業化であって、しかも先進資本主義国と同じ道をたどることは、後者は最初から拒否し、前者は不可能であるという事態を眼前にして、生ずると本書は言う（二七六頁）。

かかる意味で近代化という事を問題にするならば、その出発点となった産業革命の歴史的な意味も、マルクスによって規定されたものから発展させて、再評価されねばならなくなる。補章Ⅰの――産業革命を中心として――というサブタイトルにもあるように、そのことがここでの中心的な論点である。

マルクスの産業革命論は、機械制大工業の発展による社会的生産の展開として提示されたが、しかし工場内でのそれであり、しかもその論点は労働者の機械への従属性、疎外性にあった、と本書は言う。従ってマルクスが他面で指摘する機械制大工業が工業社会としての社会的分業の発展に及ぼす影響も、資本主義体制の枠内の問題におしとどめてしまったと批判する。このマルクスへの批判から逆に推察されるように、本書でいう工業化社会における経済構造とは、「商品経済によって結ばれた網の目のような社会的分業の体系、経済の相互関係に根ざしている」（二七九頁）ものであり、しかも、それは資本主義社会に限定されるものではない。なぜなら「社会的分業と商品経済（の）……発達は資本主義の発達と平行していたし、広くいうならば人類史全体を貫ぬいている」（同頁）からである。

では産業革命は、これらの発達の上でどのような役割を持つのか。本書では、労働手段の発達に伴う社会的分業の量的な発展を促進し、しかも分業体系を質的に転換させるものとしてとらえている。

すなわち、一六世紀以降産業革命期までをマニュファクチュア期ととらえ、そこでの社会的分業の形態を次のように規定している。農工間の生産力の水準およびその発展は均衡を保っており、従って両部門間で消費バランスを保つような分業＝水平分業が、社会的分業の基本形態である。そして各産業部門内での垂直分業は、最終製品部門の主導の下に組織されることになる。それはマニュファクチュア経営の技術的水準の低さに規定された固定的労働手段の未発達に対応した、いわばアダム・スミス的社会として表現されるものであった。また同時にそれは、マニュファクチュアを含む小商品生産が組織する局地的市場圏の形成過程と、生産力の発展に伴って局地的市場圏が統一的国

内市場へ拡大していく過程に対応したものであった。農工間の生産力水準およびその発展のテンポは均衡しており、両者の国民経済におけるウエイトも不変なままで、いわば均衡成長していた。従って当時の農業の比重の高さを考えるならば、マニュファクチュア時代は、「農業的社会」とも表わされる。

こうした社会的分業が、産業革命によって、どのように性格を変えたと、本書は言っているであろうか。産業革命の原動力は、機械体系としての新たな生産手段の発明であったが、それは最終製品部門が主導していた垂直分業を、原料生産部門が主導するものへと変化させ、しかも生産手段生産部門の相互の関連も密になり、産業連関が生産手段生産部門の主導のもとに確立されることになる。この事態を簡明に表現したものが、マルクスの拡大再生産表式である。しかも工業の生産力の発展のテンポは、農業のそれを圧倒的に上回り、工業社会としての性格を明確にする。

マルクスは、こうした社会の性格を、積極的には、人類の疎外を完成させた体系として説いた。だが本書では、基本的にはそうしたマルクスの指摘を肯定しつつも、より積極的には、分業の質量両面にわたる発展にもとづく、生産の社会的性格の発展した社会として、資本主義としての規定性を超えた工業社会の特質が実現された社会として把握する。すなわち、「工業社会の特徴的な運動法則の背後にある基本的な契機は、たしかに資本の利益の追求であり、それゆえ、それは資本の運動法則にほかならない。しかし逆に、資本の運動が工業社会特有の形をとるのは、その生産の社会的性格によるのである。先にわれわれはこの社会的生産が、生産力と生産関係という二つの契機を持つといった。このことは社会的生産が、抽象的な意味での生産様式であるということである。この場合、生産関係とは階級関係を捨象した、商品経済下での交換関係としての市場関係を意味している。……中略……われわれが資本主義経済に固有なものと考えてきた多くの性格や運動が実はこの『生産様式』そのものに、したがって生産力の近代的体系に根ざしているということなのである」(三二七～八頁)。このように、産業革命も単に資本主義確立の契機としてのみではなく、工業化社会を形成するものとして、言い換えるならば、生産力の近代的体系を実現することを通してのみ資本主義の確立があることを、本書は主張している。

二

以上見てきたような本書の近代論は、いかに評価されるであろうか。それは、産業革命を契機とした生産力の発展の過程として近代をとらえ、それを資本主義という枠を超え、人類史上に位置づけることを試みた点にあると言えるであろう。こうした試みは、本書でも指摘するように、ロストウやコールマン等

によって行われているが、それらは量的な変化のなかにのみ生産力の発展を位置づけるものでしかない。それに対し本書では、工業化社会がどのような性格を持つものとして存在するのかという、すぐれて質的な面において、この問題をとこうとしていると言ってよいであろう。こうした問題は、一面では、社会主義社会において、資本主義から遺産として何を相続するのか、という問題に光を当てていると言うこともゆるされるであろう。この意味でも本書の問題提起は、奥深いものがあると言わなければならない。

しかし、こうした問題提起の内容に立ち入って検討してみるならば、以下述べるような点について疑問を感ぜざるを得なかった。

第一に、あらためて言うまでもなく、本書でいう工業化社会における生産力とは、生産手段生産部門を主導とする分業の編成であるが、それが、社会的生産として一つの「生産様式」となるためには、その生産力としての分業の進展が、生産関係としての市場関係によって媒介されることが、必要だという。先に必要以上に長く引用したのは、このことを確認するためであった。これからわかることは、分業の進展という生産力は、市場関係＝商品経済という生産関係に媒介されて始めて社会的生産という「生産様式」になることである。この「生産様式」を近代的なものとして、資本主義の枠を超えて、人類史上に位置づけようとした時、問題は、商品経済をどう理解するのかということにある。

問題をやや広げて考えてみよう。資本主義以前の社会では、部分的に商品経済によって補足されることはあっても、基本的な再生産構造は、直接的な人間関係を軸にして形成されていた。例えば封建社会では、領主による農民の収奪は、身分関係という人間関係に基づくものとして行われ、それ故に（商品）経済外強制が必須の再生産の条件であった。しかし、資本主義社会は、商品関係が全面化し、労働力までもが商品化する社会である。商品交換関係においては、人間関係は直接結ばれるのではなく、商品交換を媒介にせざるをえない。人間関係が物象化するのである。しかも資本主義社会は労働力が商品化することから、そこでの人間は単なる商品所有者として、形式的には平等ではあるが、類的存在としての共同性を喪失した、物化した個として存在するにすぎない。アダム・スミスは、こうした商品交換関係が全面化した社会を、人間社会にとって自然な状態であるとして、彼の経済学体系を築き上げた。彼にとっての歴史は、商品経済の発展史であり、商品経済関係が全面化する資本主義は、人類の「本史」であった。

しかしマルクスは、資本主義社会のかかる意味での疎外性を経済学的に解明することを通じて、社会主義社会を人類の本史として主張したのである。従ってそこでは労働力の商品化を廃

棄することはもちろん、財の交換過程も、基本的な部分は商品交換によるのではなく、人間の主体的なコントロールの下に置かれなければならない。そうすることによって始めて、人類の疎外性は回復され、物的な関係に媒介されない、直接的な人間関係が、主体的に形成されることになる。

本書でいう「生産様式」としての社会的生産を、超歴史的なものとして規定しようという試みは、結果的にかかる疎外性を持つ商品経済の発展史として歴史を説くという、アダム・スミス的世界へ逆もどりした、「商品経済史観」であると言わざるをえない。要するに生産力は、それ自身取り出して論ずることはできない。必ず生産関係を通してしか問題にすることはできない。本書で展開された近代的な生産力体系は、商品経済＝資本主義経済という生産関係を通してしか現われない。そこから後者を捨象し、前者のみを取り出すことはできない。本書でいう近代は、資本主義社会における近代でしかないと言わざるをえないのである。

従って第二に、産業革命の意義についても以下に述べる点にあると言わなければならない。産業革命は、一面では本書で述べられているように、機械制大工業という形態を取る生産力を発展させるものであり、社会的分業を発展させる技術的基礎を創出する過程であるが、同時にそれは農工分離を完成させるものとしての意味を持つものである。従って機械制大工業が基本的な生活手段を生産する一部門で確立すれば、もはや自給的な経営は維持されなくなり、商品経済にまき込むことになる、その限りにおいて社会が資本主義に適合的なものへと改変されることになる。

本書では「生産力としての近代の建設こそが、われわれが最初に提示した近代化ということの経済的内容であり、産業革命が人類史上にもたらした基本的な貢献だった」（三二五頁）と言う。しかし近代という意味が資本主義社会における近代でしかないとすれば、その生産力も資本の生産力でしかないというきわめてパラドキシカルな「貢献」しか、産業革命はもたらさなかったのである。

最後に、やや今までの論点から離れることになるが、本書で言う近代的生産力の出発点としてのマニュファクチュア期について述べたい。資本主義の発生史に関しては、周知のように大塚史学と宇野理論との間で論争が続いている。本書では、大塚史学の理論を軸にしてマニュファクチュア社会を説いている。すなわち小商品生産者層の形成と分解の歴史としてである。かかる小商品生産社会については、すでに別稿において触れた。(1) そこでの私の論点は、要するに、小商品生産者は社会的規制力としての価値法則を完成したものとして見ることはできないということであった。つまり小商品生産者は、自らが完結した一つの再生産圏を形成しえないのである。また、小商品生産者の

分解に関しても、社会的規制力としての価値法則が、非常にルーズで幅のあるものであって、小商品生産者を内在的に分解させる程の生産力の発展は、非常に大きくなければならないことになるが、しかしそうしたものは少なくともマニュファクチュア時代には実在しなかったことを指摘した。これらの点を考える時、改めてこの時代が重商主義の時代といわれていることを想起する必要があろう。つまり、前期的資本としての商人資本が、直接的にはこれら小生産者を収奪し蓄積することを通じて、始めて分解の契機が与えられるのであり、社会的な再生産を媒介するのである。従って本書の説くマニュファクチュア期の社会的分業のあり方が、最終消費財部門へ垂直的に統合された産業の水平分業としてあったとしても、それらは商人資本に媒介され、主導され、収奪されるものとしてあったといわなければならない。こうしたものとして「マニュファクチュア時代はたしかに過渡的であるし、ある意味では未成熟といえよう」（三〇一頁）ということも理解されなくてはいけない。この意味において、マニュファクチュア期は、商人資本の時代なのである。

注(1)　前掲『農業経済研究』参照。

三

以上三点にわたって本書に批評を加えた。最初におことわりしたように、この批評の対象は、本書の補章である。従って本書全体についてコメントを加えるためには、今まで述べたことを、日本の歴史過程に即して具体化し、さらにはそれを実証していくことが必要である。それは評者にとっての、これからの課題である。